

## 韓 国 の 夏

津 守 真

今年の夏の終わり、新学期の最初の日、私は韓国幼児教育学会に招かれて、はじめて韓国に行った。二晩だけの忙しい旅行だったが、韓国の幼児教育関係者たちの熱い思いに触れて、私は現代に生きていることを実感させられた。

韓国では、学校教育法のほかに、低所得層の家庭の幼児を対象にした幼児保護法が制度化されようとしており、幼児教育関係者の間に議論が起こっている。韓国の社会は、日本、日本で学校教育法と児童福祉法とが二元化された以前の状況にある。それがいま、日本のように幼・保が二元化されようとしていることが、この法制化に対する反対の大きな理由である。ことに、「保護」だけが取り上げられ、託児という形で簡便に片付けられようとしていることも問題である。保護（養護）と教育とは、幼児教育（あるいは幼児保

育)において切り離すことはできないという考えが現代の世界の動向なのに、あらためて二元化の制度を作ってよいものか、私も疑問に思う。

日本では、幼・保が二元化されているのがすでに当然のことで、その前提のもとに財政措置もなされているから、児童福祉法のようなものが作られることは結構なことではないかと考える人が多いかもしれない。しかしそれは現状を固定して考える考え方である。かつて、幼・保が二元化される以前、あるいは二元化された当初には、幼・保は一元化されるべきであるとの意見が多かった。その当時は、幼稚園も保育所も、教育も福祉もすべてを含んだ児童省という大きな構想もあった。もしもそういうものが実現されていたら現在はどうなっていたらどうか。

韓国はいま丁度その分かれ道にある。

日本では幼・保二元化の制度に順応して、両者がそれぞれに機能を發揮するように努力がなされてきた。幼児数が増加するときには、うまくいったのだろう。それでも幼稚園の隣に保育園が作られるというようなことはしばしば起こった。また、保育所だけしかない市町村、幼稚園だけしかない市町村などと、どちらかに偏在している地域もある。このことは、いずれが両方の機能を果たしていることになる。どちらか一方があれば、幼児期の保育機能はみたとすると親は考えていることの証拠ではないだろうか。

現代の日本では、保育所は経済的貧困の家庭のみを対象にしているとは言えない。むしろ、経済的には裕福でも母親が働いているために保育に欠けると考えられる幼児が保育所に通う場合が多いだろう。働く母親は、今後も増加しつづけるだろうから、保育所の機能に対する要望は増加しつづけるだろう。

現代の家庭及び子どもの生活形態は急激に変化しつつある。長時間保育だけではなく、多様な要望に柔軟に應ずる保育が必要とされている。家庭と保育施設との両方が協力して、幼い子どもが生活しやすいように人的物的環境をつくってゆかなければならないのが現代である。

高層住宅の中で子育てをしている若い母親は、乳児期から、母子に対して開かれた、自由度の高い共同の子育ての場を求めている。これが急務であることは、幼い子どもに少しでもかわりのある人には分かっていることであるが、これは保育園の仕事なのか、幼稚園の仕事なのか。本来は両方の仕事であるが、制度上はどちらにもはいらない。子どもと家庭の要望にこたえることのできる柔軟な制度が必要とされる。英国で最近、文教局と福祉局を統合したナースリーセンターが発展しているのは、このような社会変化への対応であろう。

四十数年の幼・保二元の制度の歴史を経た現在、日本の社会で直ちにこれを一元化したら混乱も生じるだろう。しかし、この両者が柔軟に協力しあう体制ができなければ、決して解決しないであろう問題が、私の周囲にもいくつもある。

まだ制度が二元化していない社会では、その経験をへた社会での功罪をよく検討してほしいと思う。韓国の幼児教育学会の親しい方々から講演の依頼を受けたとき、私はこのようになことを考えて、これをお引き受けした。

九月初旬のソウルは、急に涼しくなった東京よりも暑いくらいだった。この夏は特別に暑い日々が続いたという。その夏の間、幼児教育関係者達は、この法案が早急に定められないように、資料を集め、討論し、精神的にはたらいたという。この運動が成功するかどうかは分からないが、一元化のために最大の努力をした事実を後世に残したいのだとその指導者達は語っていた。私もそのことをここに記録にとどめておきたい。

私が二晩泊ったヨンセイ大学のゲストハウスのすぐ前に、大学付属のナースリー・センターがあった。夜になってから、わざわざ門をあけて案内して頂いた。深山を思わせる緑の丘の中に、住宅風の洋館が三つ点在している。靴を脱いで入ると、子どもの衣裳がハンガーにかかり、子ども用のソファがある。いかにも子どもの家という感じである。オープン・エデュケーションの考えでやっているとのことだった。このナースリー・センターは大学の家政学部所属で、建物は家庭科のモデルハウスをもらいうけて改装したのだという。

私は今回の講演では、制度を中心に、この四十五年間の日本の幼児教育と保育について語った。そして、制度がどのように整備されようとも、そこでなされる日々の保育の質の向上が重要であることを結びとした。この現代に、子どもが生きやすくなるように、子どもの側に立って仕事をする者には国境はないのだと思う。子どもの側に立つ戦いをしていく人々は世界中にいることを、今回も私はあらためて認識した。

(愛育養護学校)

